

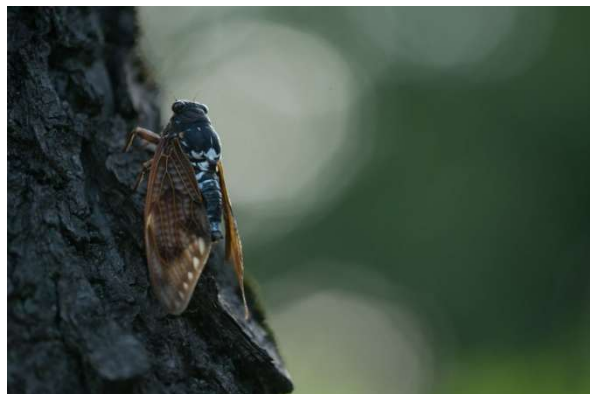
館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 1 0 月 1 3 日 (月)

発行 館長 加 藤 智 一

日本の「二季化」現象



「四季の国」と称される日本では、春の桜、夏の蝉、秋の紅葉、冬の雪といった季節の移ろいが人々の暮らしや文化に深く根ざしておりました。しかし近年、こうした季節感が揺らぎつつあります。特に春と秋が極端に短くなり、夏と冬が長く支配する「二季化」の傾向が顕著になっているのです。これは単なる体感の変化ではなく、気象データや生態系の変化、社会的影響からも裏付けられる現象となっているのです。

まず、気象庁の長期データによれば、日本の平均気温は過去 100 年で約 1.3℃上昇しており、世界平均（約 1.1℃）を上回るペースで温暖化が進行しています。この気温上昇により、猛暑日（最高気温 35℃以上）や熱帯夜の頻度が増加し、夏的な気候が春や秋にまで食い込むようになりました。2025 年の夏には、群馬県伊勢崎市で 41.8℃を記録し、日本の歴代最高気温を更新しています。また、東京では 9 月 1 日時点で猛暑日が 26 日を数え、こちらも過去最多を更新しています。こうした高温傾向は、夏の期間が長期化していることを示していると言わざるを得ません。

一方で、春と秋の「らしさ」は失われつつあります。桜の開花は全国平均で 10 年あたり約 1.6 日早まっており、京都では過去 1200 年の記録の中で最も早い開花日を更新しました。秋の紅葉も逆に遅れ、カエデの紅葉は 10 年あたり約 3.1 日遅くなっています。この「生物季節の圧縮」とも呼べる現象は、春と秋の快適な期間が猛烈な夏と駆け足で過ぎる冬の間にギュッと押し縮められていることを意味しています。さらに、梅雨の時期にも異変が見られます。2025 年の梅雨入りは東北以外の地域で 5 月中となり、梅雨明けは 6 月中でした。これは従来より 1 ヶ月以上早い梅雨入り・明けであり、春の終わりと夏の始まりが曖昧

味になっていることを示しています。空梅雨の影響で降水量が減少し、日照時間が増加するなど、季節の特徴が変質していると思えない状況となっています。

このような気候変動は自然界にも深刻な影響を及ぼしています。果樹は休眠に必要な低温が不足し、着色不良や不結実が発生しました。紅葉は気温が高すぎると進まず、秋の彩りがあせまず。昆虫の世代数が増加し、害虫被害が拡大しています。渡り鳥や哺乳類は繁殖や冬眠のタイミングを見失い、生態系のリズムが崩れています。海洋では海水温の上昇により珊瑚が壊滅的な打撃を受ける可能性があり、漁業資源の回遊ルートも北上しています。

社会的にも影響は大きく、農業では高温障害による品質低下や収量減少が起き、林業では樹木が高温・乾燥ストレスを受けて森林更新が困難になります。漁業では漁期や漁場の変動により経営が不安定化し、防災面では線状降水帯による豪雨が生活基盤を脅かしています。

この「二季化」は、地球温暖化による気温上昇だけでなく、偏西風の蛇行や海洋熱波など複合的な要因によって引き起こされています。特に北極の温暖化が偏西風の流れを変え、日本に暖気を停滞させることで猛暑が長引く構造が生まれているのです。また、日本近海の海水温上昇率は世界トップであり、これが雷雨や豪雨の頻発にもつながっています。

日本の「二季化」は気候変動の進行によって加速しており、春と秋の消失はもはや現実的な課題となっています。これは自然のリズムだけでなく、文化や暮らしの根幹を揺るがす変化であり、私たちはこの新たな季節の構造に適応する術を真剣に探る必要があります。四季を守ることは、自然と人間の共生のリズムを守ることに他なりません。

